

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 3 年 6 月 9 日現在

機関番号：14101

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2020

課題番号：19K14284

研究課題名（和文）発達障害のある児童の在籍する小学校通常学級でのインクルーシブ学級風土尺度の作成

研究課題名（英文）Study of inclusive class climate scale for children with developmental disabilities in elementary school

研究代表者

森 浩平（mori, kohei）

三重大学・教育学部・講師

研究者番号：00804139

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,100,000円

研究成果の概要（和文）：発達障害のある児童、その保護者や教員、学校心理士を対象に、望ましいと考える当該児童と周囲の児童との関係性に関する尺度（インクルーシブ学級風土尺度）を作成し、質問紙調査を行った。過ごしやすい学級風土として「学級活動への関与」「クラスメイトの親しさ」「学級内の不和」「学級への満足感」「自然な自己開示」「学習への志向性」「規律正しさ」「学級内の公平さ」に分類されることが示唆された。しかし、対象者数が少なかったことや、これまでのインタビュー調査によって得られた結果が反映できていないなどの課題があるため、今後質問項目の更なる選定や精査、対象者を増やしての質問紙調査の実施など、検証を行っていく必要がある。

研究成果の学術的意義や社会的意義

通常学級における発達障害のある児童を含む学級全体に対する支援の必要性が指摘されており、個別の指導だけでなく、学級全体への支援が行われることにより、当該児童とその周囲の児童との良好な関係性を示す「インクルーシブな学級風土」の向上につながると考えられる。国内において未だ検証がなされていない、当該児童と周囲の児童との関係を把握することを可能にする「インクルーシブ学級風土尺度」の項目や因子について今回の調査研究において検討した。教員の指導の在り方や、その効果について検証を行うことが今後可能となると考えられ、今回の成果から、尺度の項目や因子についてさらに検討・精査を行っていくための示唆が得られた。

研究成果の概要（英文）：For children with developmental disabilities, their parents and teachers, and school psychologists, we created a scale (inclusive class climate scale) regarding the relationship between the child and the surrounding children, and conducted a questionnaire survey. As a comfortable class culture, "engagement in class activities", "friendliness of classmates", "disagreement within the class", "satisfaction with the class", "natural self-disclosure", "orientedness toward learning", and "discipline" It was suggested that it was classified as "fairness within the class". However, due to issues such as the small number of subjects and the fact that the results obtained from the interview surveys so far have not been reflected, further selection and scrutiny of question items and questions with more subjects will be asked in the future. It is necessary to carry out verification such as conducting a paper survey.

研究分野：特別支援教育

キーワード：インクルーシブ教育 学級風土 学級経営 教育支援方法 コミュニケーション 人間関係の形成

1. 研究開始当初の背景

2014年1月、日本は「障害者の権利に関する条約」に批准し、一連の障害者制度改革の中で、教育分野についても検討がなされた。現在、共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築が進められている。インクルーシブ教育システムとは、人間の多様性の尊重等を強化し、障害者が精神的及び身体的な能力等を可能な最大限度まで発達させ、自由な社会に効果的に参加することを可能にするという目的のもと、障害のある者と障害のない者が共に学ぶ仕組みである。そこでは障害のある者が一般的な教育制度から排除されないこと、自己の生活する地域において初等中等教育の機会が与えられること、個人に必要な「合理的配慮」が提供されること等が必要とされている(特別支援教育総合研究所, 2015)。さらに、インクルーシブ教育システム構築に向けて特別支援教育を進めており、特別支援教育は障害のある幼児児童生徒への教育にとどまらず、障害の有無やその他の個々の違いを認識しつつ様々な人々が生き生きと活躍できる共生社会の形成の基礎として、日本の現在及び将来の社会にとって重要な意味を持つ(文部科学省, 2007)。

発達障害に関しては、文部科学省(2012)の調査において、知的発達に遅れはないものの、学習面または行動面に著しい困難を示すとされた児童生徒の困難の状況について報告しており、通常学級に在籍する発達障害の可能性のある児童生徒の割合は6.5%であった。小学校と中学校においてこの割合には開きが見られ、中学校の4.0%に対し、小学校では7.7%在籍することが示されており、小学校における発達障害のある児童への支援は、特にニーズの高い重要な課題となっている。

吉田(2009)は、通常学級における特別支援教育を展開していくための研究課題として、特別な教育的ニーズを持つ児童の視座から、参加の在り方を問い直すことや、「できない」ことがあっても周囲に頼り助けを求めることができる集団づくりを行うことを挙げている。通常学級での特別支援教育では何らかの障害があると診断されていなくても学習や行動に困難を抱える児童らをも対象とするため、保護者の理解が得にくく、必ずしも補助教員を確保できないなどの理由から、個別の介入が難しい現状である。そのため、学級全体を視野に入れた包括的な支援の必要性が指摘されている(村田・松崎, 2010)。

例えば、大久保・高橋・野呂(2011)は小学校通常学級において、個別的支援および学級全体に対する支援を行ったところ、すべての場面において対象児童の行動は改善されたが、学級全体に対する支援を実施した期間の方が、個別的支援を実施した期間よりも不適切行動の生起率や、適切行動を開始するまでにかかった時間において、高く安定した効果が得られていた。

学級風土と個別の支援の関係性について、関戸・田中(2010)は、発達障害のある児童が問題を起こしやすい先行条件として、担任・級友の存在を挙げており、学級全体が落ち着くような支援を基盤にしてはじめて、あるいは、その方が対象児への個別の対応が有効であることを示唆している。したがって、学級全体の落ち着きといった学級風土は、個別の対応をより有効とするために必要とされる要因であると考えられる。

小学校通常学級における支援についてのチェックリストが作成されており(東京都日野市公立小中学校全教師・教育委員会, 2010)、支援方法について、「学級環境」「授業における指導方法」「個別的配慮」の大きく3つに分けられている。「学級環境」は場の構造化やルールの明確化、クラス内の相互理解の工夫により構成され、「授業における指導方法」は情報伝達の工夫や参加の促進、内容の構造化等が含まれている。「個別的配慮」では、社会性や情緒のつまずき、言葉や運動のつまずきへの支援といった要素で構成されている。

海外では、学級を個人のごとくに扱い、その個性を学級風土(classroom climate)として質問紙で調査する方法が整備されてきた(伊藤・松井, 1998)。例えばCES(classroom environment scale; Trickett & Moos, 1973; 1995)やLEI(Learning environment inventory; Walberg, 1969; Fraser, Anderson & Walberg, 1982)は、代表的な学級風土質問紙として活用されている。日本においては、CESやLEIの部分的な利用(古川, 1988; 平田・菅野・小泉, 1999)があるが、学級の物理的環境の評価や、不登校児個人の環境認知の記述にとどまる。つまり、学級を関心の対象としつつも、学級環境の心理社会的側面の記述に達していない。また、国内独自の調査方法にCSS(classroom structure scale; 根本, 1983)があるが、5つの下位尺度に限られ、全体像の記述には不十分であった。その後、伊藤・松井(2001)や伊藤(2009)は、小学生や中学生を対象とした学級風土質問紙を作成している。因子として「学級活動への関与」「学級内の不和」「学級への満足感」「自然な自己開示」「学習への志向性」「規律正しさ」に分けられている。

2. 研究の目的

通常学級における発達障害のある児童を含む学級全体に対する支援の必要性が指摘されており、学級全体への支援が行われることにより、当該児童とその周囲の児童との良好な関係性を示す「インクルーシブな学級風土」の向上につながると考えた。そこで、国内において未だ検証がなされていない、当該児童と周囲の児童との関係を把握することを可能にする「インクルーシブ学級風土尺度」を開発することを目的とした。第一にこの尺度の開発に向けた質問紙調査を実施し(研究1)、第二にインクルーシブ学級風土尺度と、学級内での支援の状況や関連が予想され

る尺度との関係性を検証することとした(研究2)。

例として、「インクルーシブ学級風土尺度」の構成概念については、「顔を合わせるのを楽しみにしている」といった心理面や、「お互いの気持ちを気軽に言い合っている」といった行動面が因子として抽出されることが考えられる。それらの抽出された因子と、通常学級での「個別的配慮」や「授業における指導方法」「学級環境」の調整といった支援状況や、当該児童や在籍する児童らの「自己肯定感」や「コミュニケーション能力」「二次障害」などその他の関連が予想される。こうした尺度との関連を分析することで、インクルーシブ学級風土尺度の妥当性を検証する(図1)。

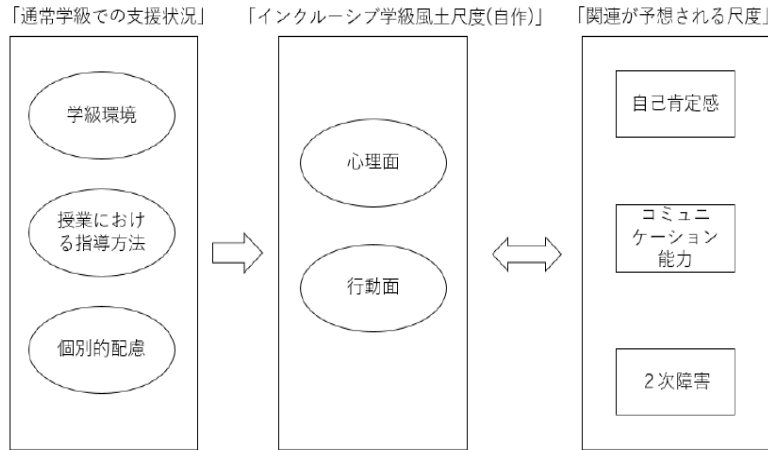


図1 作成する尺度と妥当性を検証する尺度との関係図のイメージ

3. 研究の方法

<研究1>

発達障害のある児童、その保護者や教員、学校心理士を対象に、共生社会の実現に向けた小学校通常学級の学級風土について、望ましいと考える当該児童と周囲の児童との関係性に関するインタビュー調査や質問紙調査を行う。得られた質的データをカテゴリー分けし、望ましい学級風土を構成する要素を検討する。

<研究2>

研究1において得られたカテゴリー及び記載された内容をもとに、インクルーシブ学級風土尺度を作成する。また、発達障害のある児童の在籍する小学校通常学級を担当する教員を対象に、質問紙調査を実施する。インクルーシブ学級尺度及び、通常学級での支援状況や関連が予想される尺度を調査項目とし、それらの関連性について統計分析を行うことで、尺度の信頼性及び妥当性の検証を行う。

4. 研究成果

研究1に関して、発達障害のある児童の他児や他者とのコミュニケーションの様子や課題について、教員による支援、それによる児童の反応等についてのインタビュー調査を行った。対象はX県内の小学校特別支援学級及び特別支援学校において、知的障害のある児童を担当する教員に調査協力をお願いし、調査の趣旨説明を行い、同意を得られた方にインタビュー調査を行った。

特別支援学級における、授業内での指導内容と児童の反応について、インタビュー結果をカテゴリー分けしたところ、指導内容では「協同学習活動」「制作活動」「ゲーム」「体験学習」「個別指導」に分類された(表1)。また、児童の反応では「決まりやルールを守る姿」「協同的な姿」「他者を思いやる言葉・行動」「自己統制」「言葉の発達」に分類された。また、特別支援学校における、授業内での指導内容と児童の反応について、インタビュー結果をカテゴリー分けしたところ、指導内容では「協同学習活動」「制作活動」「ゲーム」「体験学習」「企画準備活動」に分類された。また、児童の反応では「決まりやルールを守る姿」「協同的な姿」「他者を思いやる言葉・行動」「自己統制」「周囲への興味・関心」「周囲からの影響による変化」に分類された。

さらにY県内の放課後児童クラブ2カ所及び、放課後等デイサービス2カ所に調査依頼し、4つの事業所へインタビュー調査を行った。質問項目として、発達障害のある児童や気になる子に関するトラブルや困ったこと、他児とのトラブルへの支援員による対応や支援、コミュニケーション力や人間関係形成能力育成に向けた取り組み、本人が課題を自覚するための指導員の対応、児童への心のケアについて尋ねた。

発達障害のある児童や気になる子が他児と、どのようなトラブルや困っていることがあるかについて、放課後児童クラブ及び放課後等デイサービスの支援員に尋ねたところ、「暴言・暴力」「こだわりや価値観・ルール」「友人からのネガティブな関わり」「人との関わりの無さ」「パニック」「落ち着きの無さ」の6つのカテゴリーに分類された。また、発達障害のある児童や気に

なる子が他児とトラブルを起こした際に、放課後児童クラブ及び放課後等デイサービスの支援員はどのような対応や支援を行っているのか尋ねたところ、「環境づくり」「トラブルへの向き合い方の指導」「成功体験」「周囲の児童の障がい・特徴理解」「指導員同士の連携」「保護者との関わり」の6つのカテゴリーに分類された。

研究2に関して、発達障害のある児童、その保護者や教員、学校心理士を対象に、共生社会の実現に向けた小学校通常学級の学級風土について、望ましいと考える当該児童と周囲の児童との関係性に関する尺度(インクルーシブ学級風土尺度、インクルーシブ学級経営評価尺度)を作成し、質問紙調査を行った。発達障害のある幼児児童生徒や、気になる子が在籍するクラスの過ごしやすい学級風土として「学級活動への関与」「クラスメイトの親しさ」「学級内の不和」「学級への満足感」「自然な自己開示」「学習への志向性」「規律正しさ」「学級内の公平さ」に分類されることが示唆された。また、望ましい学級風土を構成する要素を統計的に検討し、発達障害のある幼児児童生徒や、気になる子が在籍するクラスでの教員による学級経営の状況について、「学級環境の調整」「指導方法の調整」「個別的配慮」「情報の共有」の4カテゴリーに分類されることが示唆された。しかし、対象者数が少なかったことや、これまでのインタビュー調査によって得られた結果が反映できていないなどの課題があるため、今後質問項目の更なる選定や精査、対象者を増やしての質問紙調査の実施など、検証を行っていく必要がある。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------